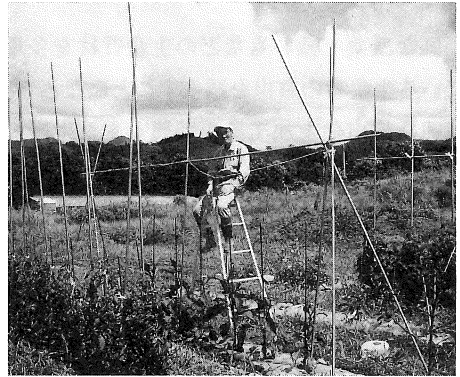


広い空 ジャガイモの花 美しく

岩手県雫石町 福 本 敏
(元化学会社勤務)



▲ネット張りの筆者

1. 夢の実現に一步

私達夫妻が、東京からこの岩手県雫石に来て、約一年半。以前から、二人とも山登りが好き、自然が好き、土いじりが大好きでした。そんなわけで東京にいるときも、「自由に農業が出来る腕前と土地があればいいな」という希望をもっていました。

腕前については、東京国分寺での市民農業大学は、まさにこれにぴったり。市内農家の方々の先生から、約20人の生徒グループが各種野菜の作り方を指導してもらい、というものです。

個々の野菜の作り方のみならず、肥料や農薬やマルチの使い方、植木の剪定、それに収穫祭のイモ鍋の作り方まで幅広く教えてもらいました。私も小学生の時、疎開先で2年ほど、野菜・鶏の経験がありましたが、すでに風化していましたので、これは本当に役にたちました。

土地については、4年前に岩手県農地管理開発公社がここを売り出しているのを、新聞で見つけました。

これで、永年の夢の実現に一步踏み出すこととなったわけです。

2. 農業一年目の昨年

一年目の農園

農業一年目の昨年は、約5700m²のこの土地にどんな作物が合っているのかをみるため、穀物豆類約15種類、野菜約20種類、花約20種類等をつくってきました。りんご・栗・ブルーベリー等6種類35本の果樹苗も植えました。犬・ヤギ・計12羽の地鶏と卵鶏の、かわいい動物達もいます。

ほぼ計画どりのペースで、自然は優しく作物を育ててくれ、収穫は予想以上でした。

優しく手ごわい自然

手ごわい自然のときもありました。夏の台風で、マルチフィルムがめくれあがり苗が中吊りになったり、秋の霜で、それまできれいだった畑がアット言う間にどす黒い枯葉の群に変わってしまったり、冬の霜柱で、玉ねぎ・アスパラガスが畝の上に根ごと放り上げられたり等々。それらを再発しないように工夫して行くところがまた、農業の面白い所かもしれません。それに農業では、草取りなど手をかければかけるほど、結果が良くなって行きます。段々キリがなくなると同時に、作物へのいとおしさもますます増えてくるようです。

失敗の数々

いろいろ失敗もありました。一度種を蒔いたところを耕して又種を蒔き、結局一畦に二重の作物を栽培したり、刈り取った稲束をカセの水平の棒にかけて干すとき、束ね方が分からず、そよ風だけで全部落ちてまた濡れてしまった等々。キツネにトウモロコシを一夜のうちに食われたこともありました。キツネ、タヌキ、イタチ、カモシカ、それに有線放送で「熊が出ました」の放送もありました。ここへは動物達より人間が後から来たので、仕方ありません。地鶏ひなを7羽育てたら全部雄でコケコッコーと一斉に鳴き始め、これはなかなか勇壮でした。後で雌に交換してもらいましたが……。

健康には最適

苗植え・間引き・虫取り等しゃがんでする仕事が多く、腰が痛くなります。実際、腰を

かがめて鶏小屋を清掃中、腰が伸ばせなくなっていたことがありました。瞬間のギックリ腰でなかったせいか、医者にかかっても治りも遅く、ジックリ腰でした。それと、農業はきれいな空気と思いきや、ハウス内の片づけ・豆の皮むき・鶏小屋の掃除等、意外とホコリ高き産業です。

それでも、屋外で一日中体を動かすせいか、東京時代と比べて約3倍の食事をおいしくとっています。農業は健康には最適です。

大勢のお客様

前の会社・ご近所・親戚等、大勢のお客様が来て下さいました。大学同級生の夫婦連れ26人が、岩手の旅できてくれたり、国分寺市民農業大学の同窓生グループも来てもらい、近所の農家を案内しました。このときは秋の紅葉がきれいで、そのお宅の裏の林と川が、多くの方に印象深かったようです。



▲農園全景

こんなわけで、来ていただいた人達のなかには、小岩井・八幡平等の観光地にゆくよりも、じっと私達の畑の周辺の風景を見ているだけでいい、という人も沢山おられました。

3. 感動の連続

いままで都会に住んでいた私達がこの山中に畑を開き、都会と田舎、暖地と寒地、人工と自然、消費者と生産者と、反対側から見た新鮮さからか、この一年間は感動の連続でした。その一端を紹介しましょう。

周辺の風景

第一の感動は、周辺の風景です。広い空間、澄んだ空気、正面の岩手山から秋田駒ヶ岳にいたる雄大な山並み、周辺の春夏秋冬の森林・田園・牧野。大白鳥はじめ自然の動物達。

でも風景に感動している私達二人は、まだ都会人のカラが残っている証拠です。しんと降る雪景色の中、地元のひととの挨拶、「きれいですね」「なにがですか？」

それと、私達の畑の野菜の花は、とてもきれいでした。例えば、ジャガイモは沢山植えましたので、広い空のもと、男爵やメークインや大白の紫や白の花が畑一面に咲いているのは、なかなか壮観でした。このような、畑の中でくりひろげられる自然の造形の妙味は、もっと時間をかけて見ていたいものでした。

収穫とご馳走

第二の感動は、収穫です。一年目の今年は、穀物・野菜・花等々を無農薬でつくりました。

成績は予想以上によく、「なんとみずみずしい、このトマト」「自分のウチで卵がとれるなんて」「こんなにおいしい米が自分達で出来た」等々。収穫の感動は、採れたてのもののご馳走への感動にもなってゆきます。



▲ジャガイモの花

宅急便で、お世話になった方々へお送りしました。

人々の温かさ

第三の感動は、人々の温かさと親切です。転居の挨拶に地元を回ったときから、先々で「これも、もってゆけ」「あれも、もってゆけ」と、作物のおみやげをいっぱいもらいました。

近所の農家の方々が、わが家の畑に立ち寄って、農業の指導等をして下さいます。「福本さんにお客さんが来ると聞いたんで、クリを煮ておいた」「干した稲が見えたので、脱穀してあげよう」「これはヤギの餌にいい」「年末に、モチつきにうちに来ないか」等々。皆さんも忙しいのに。

にもかかわらず私達は、まだまだお年寄りの話される岩手弁には慣れていないのです。

農産物の出荷

第四の感動は、出荷です。ほんのわずかでしたが、雫石農協からエダマメを出荷しました。「どんなひとが、ウチのエダマメを食べてくれるんだろう」と何だか責任感を感じました。スーパーに並んでいるエダマメと比べてみたり、新聞の青果市況覧を見たりと、消費者から生産者へものの見方が変わったようでした。

4. 反省点

先ほどの単純な失敗は笑い話ですが、本質的な失敗は、直してゆかねばなりません。一年目は、多くの反省点がありました。どの作物にも共通していて、大きいテーマをひとつ。

収穫期・精製・保存方法

まず、最も適した収穫時期をきめることは、かなり難しいことでした。カボチャは生どりで保存性の悪いものとなってしまう、メロンは遅どりで腐らせ、桃は野鳥がつついたのであわてて採ったらその時がベストタイミングだった等々。

豆類は、サヤのなかに実ができるまではうまくいったのですが、茎が倒れたままでサヤが濡れて腐ったり、収穫後湿気の高いパイプ・ハウス内で乾燥してカビをはやしたり等の、下手な乾燥・精製で随分ロスをだしました。収穫したジャガイモは、冷暗所に保存したつもりでしたが、腐ったり芽がでてきたりしました。

どのタイミングで採るのか、どのように乾燥・精製するか、どのように保存するかは、最大の反省点として残りました。一般的な家庭菜園の本では結実までの説明は多いのですが、精製や保存方法を書いた本は少ないよう

です。

5. 将来計画

収入への途

農業の資材費は、意外に高いものです。そこで、プロなみにはゆかないにせよ、目下のほそぼそとしたエダマメ出荷を発展させて、何か収入の途を太くしてゆかねばなりません。

雫石の農業は、比較的規模の大きい米作と酪農です。地元の人たちとの農協の座談会などに出席しお話を聞いています。「米も、こんど法律が変わって曲がり角だ」「牛肉や乳の値段は、先々どうなるんだ」と、大型機械の借金もあって、専業農家の経営はなかなか大変なようです。野菜も、「やれ、トマトの玉は同じ大きさ」「やれ、ピーマンは虫食いなし」「やれ、ほうれん草は、サイズ揃えて」と規格がうるさく、あげくの果て出荷価格が上下し、寒い遠い地理的なハンデもあり、これもプロで食ってゆくのは難しいようです。花も、一般の花で専業で食って行くのは、もっと大変だそうです。

私達のこの狭い農場で出来て、なにか地域の特徴を生かした「特徴ある産物」を開発して行かねばなりません。一年目の成績と保存・輸送の利点から、豆類・雑穀類がいいのではないかと、二年目のこれら種目絞りこみに入る計画です。

プラスチックの適用

前の仕事でやっていたプラスチックの農業への適用を、もうひとつの課題としています。プラスチックの農業材料は、ハウス・トンネル・マルチフィルム・べたがけ材・育苗箱…と沢山あります。

これらプラスチック材の助けを借りて、農

薬を使わず、できるだけ有機肥料を用いた「栽培環境コントロール型有機栽培」の手法を確立したいと考えています。

ところが、一年目のプラスチック使用は、大いに不満の残るものでした。補助資材にしては価格が高いのと、使い終わった後の始末に大苦勞でした。例えば、マルチフィルムは割合多く使いましたが、価格を安くしようとフィルムをペラペラに薄くしたため、この薄いフィルムを使ったあと畦からはずすとき、ちぎれて土中に残り、拾い出すのに大苦勞と、非常に使いにくいものでした。まだまだ未完成商品という感じです。プラスチックの廃棄物対策も含めて、ハウス使用後のフィルムはトンネルに、トンネル使用後はマルチに、その後は冬のハウス暖房用燃料にと、システム

を作りたいと考えています。

6. おわりに

今は寒い冬です。雪石はいいスキー場が沢山あり、これからはスキーの好きな連中がやってきます。観光地・温泉も多い所です。さあ！これからの楽しい春の作業に向けて、体力の準備をして行きましょう。（平成9年1月記）



農家の相続を考える

相続のはじまりは、ある人の「死」による。しかし人の死は、いつ起きるかわからない。早い話が、まだ若いのに不幸にも交通事故に遭ったり、あっという間に心不全で死ぬこともある。そしてその瞬間から、相続問題が起きてくるのである（民法882条）。

いま相続は、家を継ぐとか守るとかいった考えは薄くなり、まさに遺産がらみの欲得が折り重なり、骨肉の争いさえ見られるようになった。これからの相続には余計な紛争を予防するための予備知識、最少限度の知恵が必要である。

相続を定める法律は「民法」である。すなわち民法第5編は相続人や遺産分割・遺言などを定めている。しかし相続全体を知るには、第4編の親族（夫婦・親子・養子など）も知っておかねばならない。ところで民法は大战後、個人尊重の立場から相続人は誰もが平等という建て前を打ち出した。それに民法は、相続の具体的事情、すなわち農業相続か、商店相続か、病院相続か…といった配慮は一つもしていない。だから今、その歪みが日本の農村にも噴出しているのである。

相続とは、ある人が死んだときその人の財産を配偶者や子、兄弟といった近親者が受け継ぐことである。相続で問題となるのは、第1には相続人は誰がであり、第2には相続財産はどれ

ほどあるか、である。相続人では廃除とか行方不明、隠し子といった難問がある。また相続財産では、不動産のほか指輪・書画骨とう、日常用品といった動産、それに現金・貯金・株式・貸金などもあるが、亡くなった人の借金も相続財産であるから慎重な調査と確認が必須条件となってくる。それに遺産の分配との兼ね合いでは、相続財産をどう見積るかも重大問題となってくる。

さて農業の相続であるが、これを法律どおりにしたら農地は細分化され農業崩壊につながることになる。農業後継者の立場をどのように応援したらよいだろうか——こんなことを真剣に考えて研究している弁護士グループもあるようだ。ここではそういった、農家の相続で困っている事例を2～3紹介することにしよう。

・最新大型の農耕機を購入したAさんは、1年もしないうちに亡くなったが、ローンはどうなるのか。

・Bさんの妻は嫁いで30余年。義父が亡くなったが、相続権はないという。朝から晩まで農業を手伝ったのは義母とBさんの妻だけだったのに。

・都会に出た兄弟姉妹が、遺産をくれというが、ここまで農作を大きくしたのは長男で後継者の私だ。困った。

実はまだまだ、農家の相続には難問がいっぱいあるのだ。